

社会心理学の「精神操作」幻想

～グループ・ダイナミクスからマインド・コントロールへ～

5

1. 社会心理学への懐疑

オウム問題を迷走させたマインド・コントロール論

・私は 2011 年に『オウム真理教の精神史』を公刊して以降、オウム問題の現場に触れるようになった。そこで感じたのは、オウムが最悪の種類「破壊的カルト」であったことに異論はないのだが、他方、日本社会の対応にも不適切な点が目立つ、ということ。

・なかでも疑問を覚えたのは、マインド・コントロール論。オウム問題とは、「教団が無垢な一般人をマインド・コントロールして入信させた」「教祖である麻原彰晃が信者たちをマインド・コントロールしてテロを遂行させた」という単純な構図で分析され得るようなものではまったくなく、管見の限りでは、マインド・コントロール論を用いてオウムという現象を一貫して説明し得たような著作や論文も存在しない。それにもかかわらず、「オウムといえばマインド・コントロール」という通念が、今も根強く残存している。

20

自己啓発セミナーを生んだ社会心理学

・自己啓発セミナーの歴史について論じた多くの書物によれば、その直接的な起源は、「社会心理学の父」と称される人物、クルト・レヴィンが考案した「感受性訓練」にある。周知のように自己啓発セミナーは、1960 年代から 80 年代に掛けて世界的なブームとなったが、そこで行われる精神操作や人格改造の手法が過激化することにより、さまざまな団体が「カルト」化していった¹⁾。

→社会心理学の歴史を振り返ると、それが「カルト的思考法」と奇妙に親和的な側面や、「カルトの生みの親」となった側面もあるのではないかと疑わざるを得ない。

30

・社会心理学においては、人間の「受動性」、すなわち、人間が周囲の環境や社会から影響を受ける存在であることが重視されるが、しばしばそのことが過度に強調される嫌いがあり、そうして作り上げられた「受動的人間観」が、さまざまな極論や偏見を生み出してきたのではないかと。

35

2. 社会心理学の形成

群衆心理学の登場——近代人の受動性

・人間は本質的に、能動性と受動性という二つの側面を持つ。近代では特に、人間の能動性が肯定的に評価されるようになった。哲学者のカントが示した「自律 Autonomie」（自らの理性と意志に基づいて法を作り、自らそれを遵守する）という原理は、その典型例。

1) オウムで頻繁に行われた「観念崩し」という修行も、自己啓発セミナーから影響を受けていたと思われる。福本博文『心をあやつる男たち』224 頁には、オウムが自己啓発セミナー大手「ライフ・ダイナミクス」の流れを汲むトレーナーを、数千万円でスカウトしようとしていたという記述がある。

・とはいえ、それは一つの理想論であり、現実がそうであったというわけではない。近代においては、社会システムが高度に複雑化したため、個人がその全容を十分に把握し、その上で能動性を発揮することはきわめて困難となった。受動性と依存性の肥大。

・ギュスターヴ・ル・ボンは『群衆心理』(1895)において、フランス革命時に群衆が示した熱狂について分析。人々は群衆を形成すると、個人として有しているはずの理性的能力や道徳的観念を著しく減退させ、単純な感情によって全体が染め上げられる。彼らはもはや、複雑な事柄を理解することができず、暗示に掛かりやすい状態になり、カリスマ的な指導者が発する無根拠な断言を易々と受け入れてしまう。

・エーリッヒ・フロムは『自由からの逃走』(1941)において、ナチズムの運動に雪崩れ込んだ群衆の心理を分析。ヨーロッパ人は、ルネサンス、宗教改革、市民革命を通じ、自由を獲得するための闘いを続けてきた。しかし、いったん近代的諸制度が確立し、自由な環境が当たり前なものとなると、人々はむしろそれを重荷に感じ、「逃走」し始める。群衆は、自らを理不尽な仕方で締め上げる権威主義的な人物を「魔術的な助け手」と見なし、神秘的なオーラを認め、彼に全身全霊で帰依・依存することに快樂を感じるようになる²⁾。

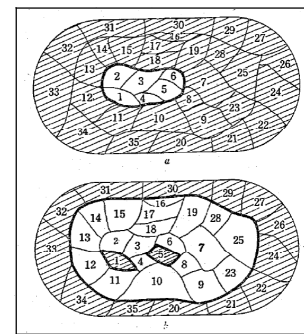
実験社会心理学の始まり——クルト・レヴィンの経歴

・1890年、プロイセンのモギルノ(現ポーランド領)で、ユダヤ人の家系に生まれる。ベルリン大学でゲシュタルト心理学を専攻。ゲシュタルト心理学は、行動主義の心理学に反対し、人間の心理が一連の「形態」的な構造に基づいて組み立てられていることに注目した。



・さらにレヴィンは、ゲシュタルト心理学を応用し、個人の内面のみならず、集団によって形成される「場」のなかにも、さまざまな形態が見出されると主張。それに関する分析を「場の理論 field theory」と呼んだ。

・1933年にナチスが政権を掌握したため、アメリカに亡命。同地で精力的に研究を行う。44年にはマサチューセッツ工科大学で「グループ・ダイナミクス研究所」の創設に携わった。ところが47年、突然の心臓発作に見舞われ、五六歳で死去。



グループ・ダイナミクスの基本モデル——溶解・移動・凍結

・レヴィンは、「アクション・リサーチ」や「リーダーシップ実験」など、さまざまな概念や実験法を考案。人間心理を集団的に扱うことに多くのメリットがあることを強調した。

子供と成人の自由空間の比較。
『社会科学における場の理論』より

→心理を個人として捉えようとする、その内実はきわめて曖昧であり、容易には客観化できないが、それを集団的に取り扱い、実験を行えば、そこで生じる変化を数量的なデータとして扱うことが可能となる。同時に人間の心理には、集団から被る作用によってもっとも影響されやすいという性質もある。レヴィンは、集団心理の分析や実験に基礎を置くことにより、科学という概念自体が一新され、「社会諸科学の統合」が可能になると主張。

2) こうした現象は一見したところ、指導者が群衆を一方的に支配しているように見えるが、実際にはそうではない。群衆はむしろ、自らの意志で自らの自由を捨て、さらには、自らの意志で指導者に服従・依存するのである。

・レヴィンの学問を集約する概念は、「グループ・ダイナミックス（集団力学）」というもの。「集団力学の開拓線」（1947）において、集団心理を変容させる方法を、「溶解・移動・凍結」という三つのステップに分けて論じた。すなわち、集団内の思考法には必ず一定の傾向性が見られるが、まずはそれを「溶解 unfreezing」させる。次にその水準を、望ましい方向に「移動 moving」させる。さらには、こうして獲得された新しい水準を「凍結 freezing」させ、安定的・永続的なものへと仕立て上げてゆく。 5

→ 群衆心理学は、集団状態において、人間の受動性が高まることを発見。実験社会心理学はさらに、そうした受動性を利用して、人々の精神を変容させようとした。

10

3. 自己啓発セミナーへの展開

感受性訓練

・先述したようにレヴィンは、グループ・ダイナミックスの最初のステップを「溶解」と位置づけ、「自己満足や独善の殻を破るためには時々情緒的な動揺を慎重に起すことが必要である」と主張。そのための訓練法として、「感受性訓練 Sensitivity Training」を提唱した。 15

・1946年、コネティカット州の人種関係委員会から、人種的・宗教的偏見を解消するための方法を考案することを求められ、二週間の研修を行った。ところが、ある夜スタッフたちが研修データを整理していると、偶然そこに数名の参加者が訪れ、データの誤りを指摘。こうした議論によって特別な刺激が生まれ、その後の研修が活力に満ちたものとなった。 20

→ 「フィードバック」の原理の発見。感受性訓練では、参加者の外見や人柄、議論の際の発言や振る舞い、過去の経験の告白などが絶えずフィードバックに晒され、それにより参加者たちは、自分が他人からどのように見えているか、人間関係においてどのような固定観念に囚われているかを自覚する。こうした行為を一定期間続けると、自我が溶解。 25

エンカウンター・グループ

・レヴィンの死後、「非指示的カウンセリング」や「^{クライアント}来談者中心療法」で知られる心理学者カール・ロジャーズが、感受性訓練を継承。人と人との「本当の出会い」を実現する手法として、エンカウンター・グループの実践を提唱した。 30

・運動は急速に普及したが、同時に、自我の防衛機制を撤廃する手法が過激化。数日間にわたってほとんど休憩を取らず、睡眠さえ制限しながら研修を続ける「マラソン・グループ」、参加者が着衣を脱ぎ捨てて会合を行う「ヌード・マラソン」、暴力的な言葉で互いの人格を攻撃し合う「アタック・アプローチ³⁾」などが行われるようになった。 35

ヒューマン・ポテンシャル運動（潜在能力開発運動／人間性回復運動）

・自己実現論を唱えた心理学者アブラハム・マズロー、サイケデリック体験に基づく精神革命を訴えた作家オルダス・ハクスリーの影響により、ニューエイジ系の思想と合流。1962年にカリフォルニアに創設された「エスリン研究所」が中心地に。エンカウンター・グループ、ゲシュタルト療法、ボディワークが活動の柱に据えられる。 40

3) アタック・アプローチは、麻薬常用者の自助団体「シナノン」において盛んに用いられた。とはいえシナノンはその後、一部のメンバーの神格化、閉鎖的なコミュニケーションの形成により「カルト」化したことでも知られる。

・活動が深まりを見せるにつれて、さまざまな負の側面も露わに。同研究所はドラッグの使用を禁じていたが、実際にはLSDの常用者で溢れていた。エンカウンター・グループの手法が過激化し、暴力が振るわれ、自殺に追い込まれる者が続出した。シャロン・テート殺害事件を起こしたマンソン・ファミリーや、巨大なコミュニオンを築いて騒動を起こしたラジニーシ教団など、「破壊的カルト」と称される団体との関係性も生じた。

5

自己啓発セミナー

・ヒューマン・ポテンシャル運動は、少人数単位の非営利的活動を基調としていたが、1970年代に入ると、大人数が参加可能な営利目的のセミナーを主宰する団体が現れた。

10

・その代表例は、71年にウェルナー・エアハルトが創設した「EST」という組織。彼は元々セールスマンだったが、西海岸に移住し、ヒューマン・ポテンシャル運動の他、ポジティブ・シンキング、セルフ・ヘルプ、神智学、サイエントロジーなどを学んだ。また、アレクサンダー・エヴァレットが創始した「マインド・ダイナミクス」や、ホセ・シルバが考案した自助グループのプログラム「シルバ・マインドコントロール⁴⁾」にも参加し、それらを折衷して、大規模な自己啓発セミナーの形式を作り上げていった。

15

・セミナーは世界的にブームとなるが、集金を主な目的とした「ネットワーク・ビジネス」が形成される、トレーナーがカリスマ化して排他性を帯びるなど、弊害も目立つように。日本でも1960年代以降、教育や企業の世界に感受性訓練を普及させることが推進され、また80年代以降には、バブル経済の時流に乗って各種の自己啓発セミナーが民間でも流行するようになったが、暴力化やカルト化という現象が発生。

4. 精神操作の失敗と「カルト」化

25

レヴィンの構想の問題点

1) そもそも、可能なのか？

「溶解・移動・凍結」の手法を用い、集団と個人の心理を意図通りに変容させられるのであれば、それによってさまざまな社会問題を解決できるはずだが、レヴィンの死から約七〇年経った今でも、そのような話はほとんど聞いたことがない。また、グループ・ダイナミクスを基盤とする「社会諸科学の統合」という事態も、実現の兆しすら見えてこない。上記の図式は一見したところ、科学に裏づけられた夢のある構想に思われたが、実際には多分に幻想的なものだったのではないか。

30

2) 暴力性のエスカレート

35

「溶解・移動・凍結」のプロセスは、参加者自身がそうした変化を望んでいる場合には、順調な進展を見せることもあるが、特にそうでないという場合には、なかなか思うように進行しない。そのため、まずは自我を「溶解」させること、防衛機制を除去することが目指されるようになり、感受性訓練を始めとする各種の集団療法においては、精神的・物理的な暴力がエスカレートした。そうした暴力に晒された者は、それによって人格の「変

40

4) 「マインド・コントロール」という言葉がいつどのように現れたのか、現状では私には分からないが、少なくともこれは、その言葉が用いられるようになった初期の例の一つである。すなわち、現在のような「カルトが駆使する怪しげな精神操作法」といったネガティブな意味ではなく、「潜在能力を引き出すためのトレーニング法」という自己啓発的でポジティブな意味合いが与えられていた。

容」のプロセスが始まったと思ひ込んだが、実際に起こっていたのは、正確に言えば人格の「崩壊」であり、その後にはしばしば、PTSDや解離の症状に見舞われた。また、強烈な「変容体験」が中毒化し、セミナー依存症に陥る者も続出した。

3) 正しい方法と言えるか？

5

社会心理学的な精神操作や人格改造が仮に可能であるとして、そういった手法に頼るのは、果たして正しいのか？ 何らかの問題を起こしたり、反社会的な思想に染まったりすると、「集団精神療法センター」といった施設に収容され、人格改造されて帰ってくる……。そうならばもはや、全体主義的な思想統制と大差ないだろう。その理論においては、意図しないうちに、人間の主体性や自律性という側面が軽視・捨象されていたのではないか。

10

「カルト」化を呼び込む構造

(1) 旧来の思考傾向や固定観念が溶解するという体験が、精神変革のために不可欠なものと思われ、重視された。

- | |
|---|
| 1) 客観的に認められた制度や事実以上に、主観的な心情や体験が重視される。(心理や体験の偏重) |
| 2) カリスマや生き神として崇拜される人間が、絶対的な決定権を持つ。(指導者崇拜) |
| 3) 世界が善と悪に二分される。(二元論的思考) |

15

(2) 訓練においては、全体のプロセスが明示されないため、トレーナーに位置する人間が過大な主導権を掌握するようになった。また、参加者たちに劇的な体験を導くことに巧みなトレーナーがカリスマ視された。

(3) 訓練を受けることで「柔軟な感受性」「開かれた精神性」を獲得したとされる人間と、そうではない人間が、二元的に区別されるようになった。

20

・社会心理学は、グループ・ダイナミクスに潜む問題点を再考すべきであったが、そうしたことは行われず。1980年代後半以降になると、感受性訓練や自己啓発セミナーは下火に。ところがその頃から社会心理学は、人々を「マインド・コントロール」する「カルト」という存在を自らの外部に見出し、奇妙な捻れを帯びた批判活動を展開し始めた。

25

5. マインド・コントロール論の構造

マインド・コントロール論の普及

・1988年、統一教会の脱会者スティーヴン・ハッサンが『マインド・コントロールの恐怖』を公刊(93年に邦訳)。95年には、社会心理学者の西田公昭が『マインド・コントロールとは何か』を出版。

30

・マインド・コントロール論は、「カルト」への恐怖や嫌悪を推進力とすることにより、急速に社会に普及した。とはいえ、その後は目立った議論の進展が見られず、同時に、理論面・実践面からのさまざまな批判も向けられるようになった⁹⁾。

35

洗脳の技法を洗練させたもの？

・マインド・コントロールについて論じられる際、その出発点に位置づけられるのは、ロバート・リフトンの著作『思想改造の心理——中国における洗脳の研究』(1961)。1950年代の中国においては、共産主義に賛同しない人間を各種の収容施設に強制隔離し、次頁のような技法を用いて思想改造を施すことが試みられた。

40

5) 渡邊太「洗脳、マインド・コントロールの神話」(宗教社会学の会編『新世紀の宗教——「聖なるもの」の現代的諸相』所収)、米本和広『我らの不快な隣人——統一教会から「救出」されたある女性信者の悲劇』を参照。

・とはいえ、調査した 25 人のうち、共産主義に転向した者は 1 人のみ。リフトンは「彼らを説得して、共産主義の世界観へ彼らを変えさせるという観点からすると、そのプログラムはたしかに、失敗だと判断せねばならない」と述懐。

- 1) 環境コントロール
- 2) 神秘的な人間操作
- 3) 純粋さの要求
- 4) 自白信仰
- 5) 聖なる科学
- 6) 荷重言語
- 7) 人間を超えたドクトリン
- 8) 存在の分配

5

→ところが多くのマインド・コントロール論者は、その試みが結局のところ失敗であったことを明確に説明しようせず、それを曖昧にしたまま、マインド・コントロールは洗脳よりも「もっと巧妙で洗練されている」と話を進める。

10

マインド・コントロールの基本モデル——解凍・変革・再凍結

・ハッサンによれば、「マインド・コントロールは、露骨な物理的虐待は、ほとんど、あるいはまったくともなわない。そのかわり催眠作用が、グループ・ダイナミクス（集団力学）と結合して、強力な教え込み効果をつくりだす。本人は、直接おどされるのではないが、だまされ、操作されて、決められたとおりの選択をしてしまう。だいたい、自分に 15

(1) 解凍 unfreezing

対象となる個人に急激な変革を起こさせるためには、その人の現実を揺さぶり、人格を崩壊させなければならない。その際には、睡眠や食事の制限、瞑想への誘導、秘密の告白、 20

(2) 変革 changing

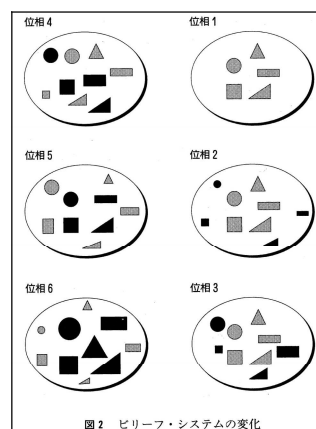
古い人格が崩壊したことによって生じた空白に、新しい人格を植えつける。典型的な手法は、形式ばった教えを幾度も反復させ、催眠状態へ導くことである。また、新入会員を小グループへと振り分けることにより、自らの役割を自覚するように仕向ける。 25

(3) 再凍結 refreezing

新しい人格の定着を図る。新規のメンバーは、常に古参のメンバーを見習うように仕向けられる。メンバー同士の交わりによってこそ「真の家族」が作られると説かれ、人格の再凍結を促進するために、新しい名前を与えられることもある。

30

・マインド・コントロールは、上記のプロセスを基本としつつ、フェスティンガーの認知不協和理論、ミルグラムの服従実験、チャルディーニの影響力論などに示された、さまざまな社会心理学的テクニックを用いて施される。



35

・西田は、「破壊的カルトのマインド・コントロールとは、他者が自らの組織の目的成就のために、本人が他者から影響を受けていることを知覚しないあいだに、一時的あるいは永続的に、個人の精神過程（認知、感情）や行動に影響を及ぼし操作すること」と定義。「ビリーフ・システムの変化」として説明した。

40

・西田の議論も、基本的にハッサンのそれと変わらない。マインド・コントロールは、人格の「解凍・変革・再凍結」を基礎に置きながら、認知不協和理論や影響力論の他、ヴァーノンの感覚遮断実験、ジンバルド一の監獄実験、プライミング効果論など、各種の社会心理学的テクニックを駆使することによって行われる。

45

マインド・コントロール論の矛盾や問題点

(1) カルトのみならず、宗教全般に当てはまることなのでは？

マインド・コントロール論では、「解凍・変革・再凍結」のプロセスに従い、信念体系に変化が生じると説かれる。しかしそれは、宗教的回心の全般に見られることではないか。

こうした議論においてはしばしば、マインド・コントロール自体は良くも悪くもない、カルトがその技術を「悪用」していることが問題だ、と主張されるが、もしそうなら、カルト問題にあえてマインド・コントロール論を持ち出す意義自体が消滅する。

(2) そもそも、可能なのか？

マインド・コントロール論を文字通りに受け止めれば、人は巧妙に精神を操作されることにより、まったく気づかないうちにカルトの一員となり、無自覚なまま靈感商法やテロリズムといった反社会的行為にさえ手を染めるようになるという。しかし、具体的な事例でこうした現象は見られないし、また、実験によって実証されたこともない。

(3) 社会心理学が生み出した幻想が「自家中毒」を起こしているのでは？

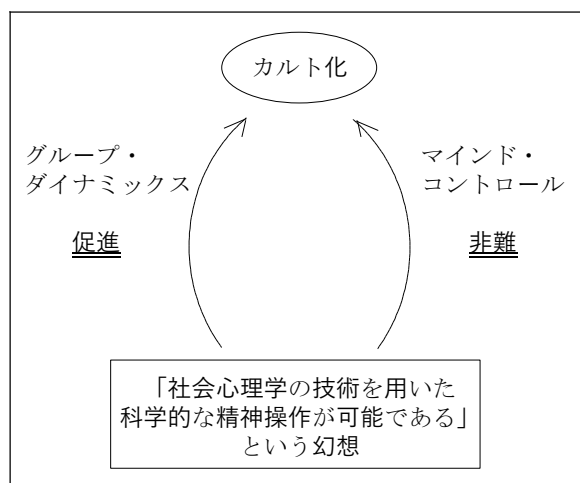
確かに、オウムを含む一部の「カルト」では、人間の精神を科学的に操作し、劇的な仕方で人間を生まれ変わらせようとする発想が見られる。またそれによって、「カルトは信者をマインド・コントロールしている」という印象が強められている。

とはいえ、そうした発想を作り出し、社会に広めたのは、何よりも社会心理学自身であった。人間の精神を科学的に操作するという事は、実際には容易ではなく、現状では不可能と言いつつの方が実態に近い。にもかかわらず、そうしたことがあたかも可能であるかのような幻想が不用意に広まることによって、さまざまな集団精神療法の過激化や「カルト化」が進行した。

正確に言えば、こうした種類のカルトは、人々が「精神を操作される」ことによって生じたのではない。「科学的な精神操作が可能である」という幻想が広まり、人々が自らそれを信じ込むことによって生じた、と考えるべきである。

→社会心理学は本来、自らの図式から数々のカルトが派生したことを認め、その原因を明らかにすることにより、幻想の根を断つべきであった。しかしそうしたことは行われず、ある時期から、カルトが「解凍・変革・再凍結」といった手法を用いてマインド・コントロールしているという、短絡的かつ責任転嫁的な非難へと転じた。

ここに見られるのは、まず片方の手では、「社会心理学の技術を用いた科学的な精神操作が可能である」という幻想を広めることでさまざまな団体の「カルト」化を促進し、他方でもう片方の手では、その幻想を外部に投影しつつ「カルト」を非難するという、「自家中毒」や「マッチ・ポンプ」と称しても過言ではない構造なのではないか。



マインド・コントロール論の弊害

(1) 正確な説明の欠如

「カルト」とは、さまざまな問題を解決しようと、多くの人々が特定の思想や考え方、

特に単純で偏向したそれを支持するところから生じる。マインド・コントロール論は、カルト問題の本質を誤認させるため、一般社会にいつまでも不全感・不安感が残存する。

(2) 対話の阻害

マインド・コントロール論は人々に、カルト的な団体と接触すれば精神操作されるのではといった、過剰な不安感をもたらす。カルト問題を解決するためには、当該団体と冷静で粘り強い対話を継続することが必要不可欠なのだが、それが不可能になる⁶⁾。

(3) 責任の所在の極端化

カルト的な運動とは、当該団体と周辺社会のあいだ、指導者と信奉者のあいだの、複雑な相互作用から生じる。ところが、マインド・コントロール論に依拠すると、マインド・コントロールした団体が悪い、さらには、その中心にいた指導者が悪いと、責任の所在が極端化してしまい、その後の処遇も著しく不公平なものとなってしまう。

(4) 主体性の喪失

「マインド・コントロールされていた」ということを理由にカルトから脱退すると、それによって一時的に自身の責任を免れることができるが、それは同時に、自身の根本的な主体性を否定することにも繋がる。カルトに関与したことを自身の責任と認めず、すべてを団体のせいにしてしまう歪な思考回路が生じることもある。

(5) 被害妄想の乱反射

マインド・コントロール論は、「見えない敵が密かに自分をコントロールしようとしている」という被害妄想を増大させる。その論理は実は、陰謀論と近似的であり、オカルト的な書籍では、「権力者が大衆をマインド・コントロールしている」という主題が見られることも多い。カルト側と反カルト側でマインド・コントロール論の応酬となり、被害妄想が乱反射しながら昂進してゆくという現象も生じる。



(6) 法秩序の瓦解

裁判で扱われるさまざまなケースにおいて、関係者の行動の一つ一つに対し、「マインド・コントロールされていた」可能性を考慮に入れ始めると、審理をスムーズに進めることは著しく困難になる。また、そういった理由から犯罪への責任が減免されるということになれば、個人の主体性に立脚する近代の法秩序は、根底から瓦解してしまう。

6. おわりに——受動的・依存的人間像からの脱却

主体性の確立を目指した地道な努力

・社会心理学が指摘したように、近代の社会システムにおいて人間は、受動的・依存的になりやすい。とはいえ、「人間が集団の力や場の力に支配され、あたかもロボットのように精神を完全にコントロールされてしまう」というのは、明らかに現実離れした極論。

・本来われわれが目標とすべきは、近代の人間が受動的・依存的になりやすいという事実を認めた上で、そこから脱却する方途を見出すことであつたはず。そのためには、周囲からいかなる影響を受けようとも、最終的には自ら考え、自ら決断し、自ら責任を取らなければならないという、主体性の原理の重要性を強調し続けなければならないし、同時に、健全な主体性を発揮するために必要とされる幅広い知識を身に付ける努力を怠ってはならないだろう。

6) 信者を拉致・監禁し、「ディブプログラミング」と呼ばれる脱マインド・コントロールの手法によって強制改宗させるというケースも横行した。米本和広『我らの不快な隣人』、室生忠編著『大学の宗教迫害』を参照。